

佳作

オンリーワン

山形県河北町立河北中学校

2年 水戸部 ののか

フロアを揺らす振動、ビートを刻む鼓動、ステージに広がる感動。私をとりこにしたダンス、「ソウル」の魅力です。

私がダンスを始めたのは5歳の頃でした。始めた頃からダンスが大好きで、苦しいことやつらいことがあっても「辞めたい」と思ったことは一度もありませんでした。さまざまなジャンルのダンスに触れる中で出会ったのが、「ソウル」というジャンルでした。「ソウル」は、ソウルミュージックのリズムに合わせて踊るダンスのことで、ストリートダンスのもととなったものだと言われています。「ノリ」や「直感」が重視され、他のジャンルのダンスに比べて表現の幅が広いのが特徴です。

「ソウル」に出会ってからの日々は、楽しいことばかりではありませんでした。つらく、苦しい練習に、涙を流すこともありました。しかし、目標とする大会で優勝を勝ち取ったときには、想像を超えるうれしさと達成感で満ち溢れていました。ここにたどり着くまでの度重なるメンバーとの衝突は、気づけば強い絆に変わっていました。

中学1年の夏頃、私はダンスに全力になりすぎるあまり、自分にとってダンスが仕事のように義務化してしまっているのに気づかず、体調を崩してしまいました。何もする気になれず、学校にも行く気力がわからない。運動をするためまいがして、ダンスどころではありませんでした。まるで感情がなくなったかのように笑えなくなり、自分の体ではないような感覚さえ覚えました。受診した結果、自律神経失調症と診断されました。どん底にいた私を救ってくれたのは、家族、そして、これまで一緒に戦ってきたメンバー、ダンススタジオの先生方でした。練習ができない期間も、ずっと励まし続けてくれました。そのおかげで、少しずつ「ダンスがしたい」と思えるようになっていました。ただ、気持ちと体は一致せず、動こうとしても体が拒否する日々が続き、「ダンスがしたい」と思えば思うほど、ダンスのできない状況が悔しくて悔しくてたまりませんでした。

そんなある日、SNSを見ていると、「ソウル」を踊っているダンサーさんが目に留まりました。しなやかさ、繊細さ、力強さ、一つひとつの動きに凝縮された、その「ソウル」を見て、「この方のようにになりたい」と強く思いました。その日から、ダンスに復帰できる日を心待ちにしながら、SNS越しの「ソウ

ル」に夢中になっていました。そしていつしか、強い憧れを抱いていました。

ようやく体調が戻り始め、徐々にダンスができるようになってきた頃、憧れのダンサーさんが東京でレッスンをするという情報がSNSに投稿されました。

「これは行くしかない」と思い、すぐ両親に相談しました。すると、すぐに応募してくれ、レッスンを受けられることになりました。

レッスン当日。その時間は、まさに夢のように過ぎていきました。初めてソウルのダンサーさんのレッスンを受け、聞くこと、見るのがすべて新鮮で、そして何より、「楽しい」が凝縮されていました。

「この方のダンスを極めて、周りにはいないオンリーワンのダンサーになりたい」

そう、強く思いました。

レッスン後は、教えてもらった振りを何度も練習したり、基本となる動きを見返して再確認したりしながら、技術力の向上に努めました。また、ダンサーさんがオンラインレッスンをしているということを知り、すぐに申し込んで、そのレッスンもスタートさせました。レッスンを受ける回数を重ねるごとに憧れの気持ちは強くなり、それに比例して自分自身のスキルも向上している手応えを感じました。「ソウル」がますます好きになっていきました。

たくさんの経験を通して、私は一つの目標を立てました。それは、「オンリーワンのソウルダンサー」になること。私の憧れの「ソウル」を全身で表現したい、そう思っています。そして、私がそうであったように、私も誰かに憧れられるような、そんな「ソウル」を追求したいです。

つらさも、苦しさも、うれしさも、喜びも、すべて「ソウル」が教えてくれました。私はこれからも「ソウル」と向き合いながら、チャレンジし続けます。

「オンリーワン」を目指して。